

自然賛歌

極楽寺の自然観察(六)

妹尾 治人

山くずれの際に弥生式土器が沢山発見されたと言う極楽寺山の二十三丁遺跡を「廿日市町の文化財地図」をたよりに左側の谷へ下りて見た。どうもその場の地図を読み違えたらしく発掘調査された場所を確認することは出来なかった。

こんな厳しい山の中でどんな人が暮らしていたのだろうか？二十三丁遺跡の場所をよく確かめてもう一度訪ねてみたい。そしてその場所に標識を付けて置きたい。

二十三丁遺跡が見つからないまま、登山道に引き返し、右に大きく曲った所に見晴らしのきく平坦な場所があり、そこに柵が設置されているので休憩するには絶好の場所である。そこには、コナ

ラ・アベマキ・リョウブ・オオバヤシヤブシ等の大木がある。



リョウブの木肌

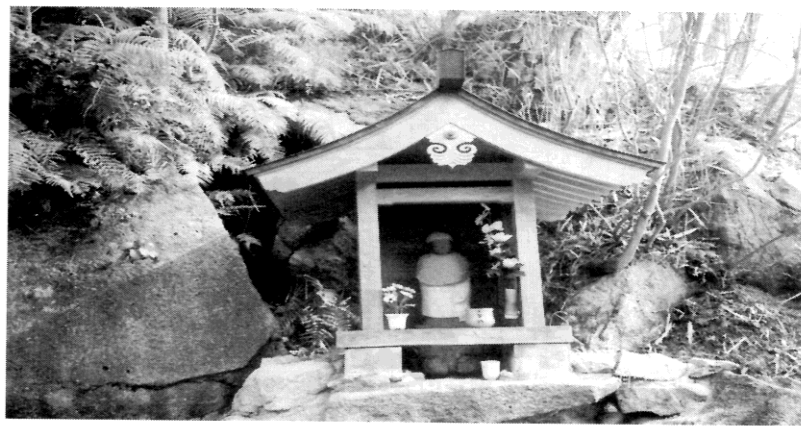


リョウブの花

廿日市の街並みと海を眺め一息入れて進むといよいよ急な坂道となる。二十四丁碑のところにあと四十分と書いた商工会の案内標識がある。次の二十五丁碑は見当らない。このあたりには大きな岩が現われ、岩を縫うように堀切状の道を進むと二十六丁碑がある。

二十六丁碑の右上に像高五十二糎の石地蔵が安置されている。古老の話しからここには元木造の観音像があったがそれが盗まれて現在の石地蔵になったと聞く。

石地蔵を安置する祠は壊れかけていたが、平成十七年五月吉日、有志の浄財で新築された(写真参照)。



この観音堂とその付近の山を通称「てなしさん」と呼ばれている。地蔵様に一礼して少し行くと見晴らしの良い断崖絶壁がある。狭いので気を付けて観察してみると、右側の大きな岩のところにウラジロの木があり秋には赤い実をつける。齧ってみるとリンゴの味がした。ウラジロは葉の裏が白いのでこの名がついている珍しい木で道中には数本しか見られない。

大きな岩がゴロゴロした道を進むと左上に二十丁碑がある。そして次の二十八丁碑は見当らないが、その辺りに標高五一八・六メートルの三角点の標識が右側にある(写真参照)。



その三角点の奥に野路菊が群生している。昔は道中で瀬戸野路菊が沢山見られたが今は極めて少なくなりました。

次の二十九丁碑には奈良屋与七郎の名が見られる。奈良屋は廿日市中央公民館のあたりに居住していた豪商だと言われ、極楽寺の平良参道の三十

七丁碑の建設に深く貢献された人物だと思われる。
極楽寺山は赤松の二次林で現在では松はほとんど見られないが、この辺の左側斜面には赤松の大木がまだ多く残っている。以前には松茸が出ていたと聞けるが、今では全くの幻となってしまった。

三十丁碑の手前で佐方からの直行登山コースと合流し、更に四十メートル位登った所で、国道四三三号長野ループからの原参道と出会う（写真参照）。次号に続く。

（自然観察指導員）



「極楽寺自然と歴史を見に登る」